

A waterfall cascades down a layered rock face in a forest. The water flows from a small pool at the top, creating a misty spray as it falls. The surrounding area is filled with trees and dense vegetation, including some bare branches and green foliage. The overall scene is a natural, serene landscape.

生きる地層 | Living Strata

## はじめに

このプロジェクトは資生堂創設 150 年を記念したウィンドウアートのプロジェクトである。

資生堂の社名の由来である『易経』の一節に「至哉坤元 万物資生」という言葉がある。節目である年に改めてこの言葉の意味を考えると共に、大地の徳やその雄大さを鑑賞者と共有し、それぞれが根源を振り返ることができるウィンドウアートを目指した。

モチーフとしたのは「地層」。

地層とは、大地が生きてきた時間そのものであり、私たちはその大地の徳に生かされている。その生命力を表現することで、見る人の根源にある心を震わせるようなウィンドウにしたいと考えた。

近年では、気候変動や地震など、自然界のバランスが崩れている。自然は私たちにとって脅威の存在として捉えられることが多くなった。地層を観察すると、私たちはそういった歴史の積み重ねの上で生かされているということを思い知らされる。大地に感謝をして、生活している今の環境を見つめ直す必要がある。日本を代表する街として発展してきた銀座の街並みと地層を重ね合わせて見ることで、日々の生活や、環境との共存のあり方を見つめ直すきっかけになってほしいと思う。

いたれるかなこんげん

ばんぶつとりてしょうず

至哉坤元 万物資生

大地の徳はなんと素晴らしいものであろうか。

すべてのものは、ここから生まれる。



地層をモチーフにデザインすることを決め  
この雄大さをどう表現するか検証する中で  
接状剥離という造形保存技術に辿り着いた。  
実際に地層を剥ぎ取ることでありのままの  
表情を保存する手法である。



ビルのウィンドウは2つの大窓と6つの小窓で構成されており、大窓にはそれぞれ形状の違う地層を展示している。地層の大きさは4mにも及び、そこには何十万年という途方もない年月の歴史が詰まっている。

SHISEIDO  
EST. 1897  
GINZA TOKYO  
PARLOUR

生きる地層

Living strata

地層の表情からは、さまざまな歴史や情報を読み取ることができる。

例えば、夏に堆積した層と冬に堆積した層では、その色に大きな差がある。灰色の部分が冬の層に当たるが、これは冬の間に枯れ落ちた葉や枝が炭素となり堆積することでこの色が生み出されている。そして、夏の層と冬の層が繰り返されることでできる模様は「年縞」と呼ばれており、地殻変動による地層のズレや亀裂と合わせて、その土地の気候変動や歴史を読み取れる。

季節の移り変わりや自然現象は、どれも私たちが立っている大地を形作ってきたものだ。その膨大な歴史の表情は、私たちに大地の雄大さや偉大さを感じさせてくれる。

高原火山の北麓、カルデラ陥没によってできた塩原盆地（東西約5 km、南北約2 km）に堆積した湖成層。約1mmの厚さで白色と褐色の薄層が定期的に繰り返し、珪藻の殻片からなる白色層が寒冷な季節を、泥や珪藻殻片等からなる褐色層が温暖な季節を示して1年間の季節変動をあらわす（年縞）と推定されている。火山性の碎屑物をしばしば挟む。コンポリュート葉理やスランプ構造など、脱水や流動を示す構造が発達する層準もある。

神奈川県立生命の星・地球博物館 石浜佐栄子氏による文献  
『湖成堆積物からなる塩原層群宮島層 露頭剥ぎ取り標本』から引用





朝

夜

地層には一日一回転という、一見すると動いていることに気づかないようなゆったりとした動きを与えた。

街行く人が見る時間によって、表情が変化する仕掛けを施した。

膨大な時間の中で、気づかぬうちに動いている大陸の壮大な動きを表現している。

日の光を浴びながら表情を変化させる様は、まるで生きているかのような生命力を感じることができる。

小窓ディスプレイには、FAROのシェフパティシエである加藤峰子の作品『刻まれた香りの記憶』を展示。地層には、多様な生物が生きてきた痕跡が残されている。その一層一層に刻まれた風景や香りを想像し、表現した。





Process



## 地層のリサーチ

日本有数の美しい地層が見られる那須塩原の要害公園に訪問。

途方もない年月をかけて形成された地層の前に、とてつもない雄大さを感じた。それはまさに、「万物資生」の表す大地の雄大さそのものであり、資生堂の歴史の積み重ねと重なった。

この場所の地層は湖成層といい、元々湖だった場所に、比較的安定した環境の中で砂や泥が堆積することによってできる層のため、水平方向に延びる繊細なラインが特徴だ。その美しい模様の中には亀裂や鏽、生物や植物の化石といった大地の歴史がはっきりと刻まれていた。周辺の山々から流れる水によって時間をかけて大地が削り出され、今もなお途方もない年月をかけて形を変え続けている。



## 地層の剥ぎ取り

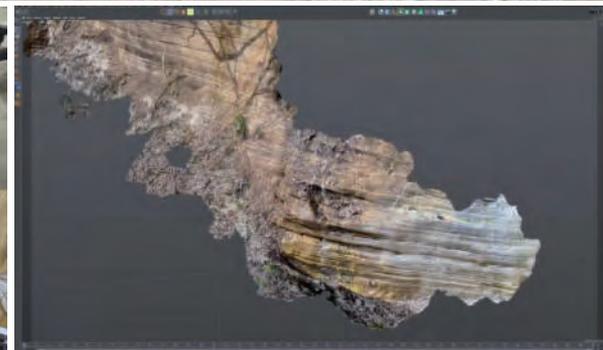
地層に特殊な薬剤を散布し、そこにガラス繊維の布を貼りつけていく。一日待つと地層の表面が繊維に定着するので、それを一気に剥がし取る。本来は巨大で硬く、自由に操ることができない地層を、自然現象による亀裂や、表面の凹凸といった立体的な表情を保ちながら、絨毯のように薄くてしなやかな状態で採取することができる。



## 形状のスタディ

大地の力強い美しさを表現するために、剥ぎ取った地層の土地の形状を3Dスキャンし、解析しながらデザインに落とし込んだ。

時間をかけて形成された緩やかな形状や、急激な変化によるダイナミックな形状など、時の経過や雄大さを感じ取ることができる形状をピックアップしウィンドウディスプレイとして落とし込むためのスタディを重ねた。



## 補修 / 成型

剥ぎ取った地層を、よりはっきりと層が確認できるように仕上げていく。余分に付着した土などを洗い流し、剥離しきれなかった部分を補修する。最後にコーティングを行うことで、劣化させることなく長期間保存することができる。博物館で用いられる「原地再生」の手法だ。スタディした形状を元に、時の流れや大地の雄大さを感じられる形状に地層を成型していく。





Creative Direction : 信藤洋二 / 資生堂クリエイティブ  
Pastry Chef : 加藤峰子 / FARO  
Art Direction : 金内幸裕 / 資生堂クリエイティブ  
Design : 布川光郷 藤原慧菜 中榮康二 中里洋介 伊藤愛希 鈴木慧 諸戸里帆 / HAKUTEN CREATIVE  
Produce : 楯誠志郎 / HAKUTEN CREATIVE  
Technical direction : 熊崎耕平 / HAKUTEN CREATIVE  
Construction : 熊崎耕平 新宮海生 Chiawen Lin / HAKUTEN CREATIVE  
Movie : こじまぼん助 中里洋介 / HAKUTEN CREATIVE  
Special Thanks : 森山哲和 / 考古造形研究所 石浜佐栄子 / 神奈川県立生命の星・地球博物館 / 小島鉄工株式会社 株式会社蒼天